

CHOPIN
magazine

I ♥ PIANO
ピアノ音楽誌
June 2019 No.425

6

We Love Piano

～きっとみつかる。お気に入りの一台～

interview

金子三勇士

イリヤ・ラシュコフスキー

藤原由紀乃

topic

北とびあ ポーランド&ショパン祭

「ショパン—200年の肖像」展

report

パリ国際アマチュアピアノコンクール

ロームミュージックフェスティバル

これを知ったら、もう聴けない・・・怖い曲

ケヴィン・ケナー
Kevin Kenner

ファイナリストたち。左よりロジャー・ルオ氏(第2位および審査員賞/弁護士・アメリカ)、ジュリアン・エロー氏(第5位/判事・フランス)、大江博OECD日本政府代表部大使(第5位)、ジェレミー・メッツェナー氏(第3位/グーグル法律顧問・スイス)、セバスチャン・アメンバール氏(第1位および聴衆賞/企業副会長・チリ)、ヨハネス・ゲヒター氏(第3位/システムエンジニア・ドイツ)

report 第29回パリ国際アマチュアピアノコンクール

The 29th Paris International Competition for Outstanding Piano Amateurs

公式ウェブサイト www.pianoamateurs.com

「対決、するのではなく手を取り合う。」
アマチュアピアニストたちの志

取材・文 船越清佳(ピアニスト・音楽ライター)



©Reiko Hayakawa

ファイナリスト6人は、国籍をそれぞれ異にしながらも全員が男性。企業副会長を務めるチリ人のS・アメンバール氏が、メンデルスゾーン《厳格な変奏曲》を均整のとれた響きでドラマティックに弾ききり、優勝に輝いた。第2位はベイトーヴェンのピアノ・ソナタ第23番《熱情》を演奏したアメリカ人弁護士、R・ルオ氏。構成力と集中力に長けた氏は、終始安定した演奏が評価され「プレス賞」も獲得。第3位はドイツ人のシステムエンジニア、J・ゲヒター氏。シューマンの《アベック変奏曲》をチャーミングに演奏し、芸術的センスの点では抜けていた。

第5位入賞の大江大使は、すでに多くの受賞歴を持つ。「第12回シヨパン国際コンクール・イン・アジア」のアマチュア部門で優勝した時、別部門の優勝者は牛田智大さんや小林愛実さんだった。「受賞者コンサートでは、当時11歳の牛田君に「頑張ってくださいね」と励まされたんですよ」と笑う。

コンクール前は、公務や出張の合間にレッスンを重ねた。「ヨーロッパ勤務中にファイナルまで行きたいと思っていたので、目的が果たせてほっとしました」とあっさり語る大江大使だが、予選ではハプニングもあった。欠席者がいた時間帯にたまたま会場に居合わせたことから、全く予想外のタイミングで舞台上に登る羽目に。「それにもかかわらず、大江大使はシヨパンのソナタ第3番第1楽章を熟演。準々決勝、準決勝も、しつとりと熟成した魅力を湛える彼のシヨパンが票を集めました」と

ポーランドの「アマチュアピアニストのためのシヨパン国際コンクール」、アメリカの「ヴァン・クライバーン国際アマチュアピアノコンクール」と並んで、世界三大コンクールの一つとされる難関が「パリ国際アマチュアピアノコンクール」である。創設者ジェラルド・ベッケルマン氏はフランス最大規模の保険会社A.F.E.R.の総裁。「自分が、このコンクールでしかなかったらと想像すると味気ないですね」という氏が、自分のより優れたアマチュアピアニストたちが、音楽交流の場を提供したいとコンクールを立ち上げて30年。創設以来世界75か国から、2000人を超える参加者を迎えてきた。

第29回となる今回も、各国から様々な職業に就く1000人近くの参加者がパリに集合し、3月23日にソルボンヌ大学の大講堂で決勝審査が行われた。予選から順調に勝ち進んでいたパリ駐在中の大江博・経済協力開発機構(OECD)日本政府代表部大使が、陰影に富むシヨパンのノクターン作品48の1とボロネース第7番《幻想》を披露し、第5位を受賞。同コンクールでの日本人決勝進出は、2012年以來の快挙である。

審査員席にはジャン・マルク・ルイザダ、マルク・ラフォレ、エリック・ハイドシエック、レナ・シエレシエフスカヤなど、例年にもれず超一流の演奏家が並び、日本からは、前年に続いて北海道国際大学教授・桐朋学園大学院大学講師の長谷正一氏が招聘された。各国音楽誌の記者が構成する審査員から与えられる「プレス賞」、聴衆の投票による「聴衆賞」も設けられて



©Reiko Hayakawa
ファイナル審査でショパンを演奏する大江博OECD日本政府代表部大使(会場・パリソルボンヌ大学大講堂)



©Reiko Hayakawa
大江OECD大使ご夫妻、審査員の長谷正一氏とE・ハイドシェック氏



©Reiko Hayakawa
準々決勝に進んだ国連ユネスコ教育局ESD課専門官の斎藤珠里さん。師であり同コンクールの審査員を務めるJM・ルイサダ氏と。

は、長谷氏を始めとする審査員方の弁だ。みずから音楽を通して国際交流に尽力し、晩餐会などで演奏を披露する機会も多い大江大使だが、やはりコンクールに挑戦する必要があるという。「競争心ではなく、コンクールという厳しい目標が自分のスキルアップに、上を目指すことが音楽の深化につながると思うからです」という大使の次の目標は室内楽。9月にはベルリンフィルのチェリストとの共演が予定されている。

今回は日本から12人がエントリー。予選を突破し準々決勝に進出したもう一人の日本人が、国連ユネスコ教育局ESD(持続可能な開発のための教育)課専門官の斎藤珠里さんだ。アメリカ滞在中はテレビ局



©Reiko Hayakawa
パリ国際アマチュアピアノコンクール創設者、ジェラルド・ベッケルマン氏

で、その後朝日新聞記者として幅広く活躍しながら3人の子供を育て上げ、30年間のブランクを経て6年前にピアノを再開した。「学業や仕事、子育てなどは、目に見えぬ達成感をもたらします。音楽は魂の声のような、言葉に表せない自分の感性を導き出してくれます。そして、その内なる声は、努力すれば聴く人にも伝わります。恋愛にも似た至福の時間です」という斎藤さんは、パリに居を移してから連弾を始めます。連弾コンクールで受賞も重ねるが、素晴らしい先生との出会いに、ソロへの意欲も掻き立てられた。「F・ビュッフェ先生というパリ・エコールノルマルの教授なのですが、こんなに音色にこだわる綿密なレッスンは初めてでした。指使いによって音色

が多彩に変化することを知りました。その後出会ったシェレスカヤ教授の「文学的なイメージから曲の神髄に迫るレッスン」も衝撃だった。レッスンを受けた曲を弾いていると、今も耳元でシェレスカヤ教授の声が聞こえ、別世界に迷い込んでいくような気がするという。さらに大きな転換点をもたらしたのは一年前から師事しているルイサダ先生だ。毎レッスン、プロアマ分け隔てない熱のこもった指導を受け「自分はまだ成長できる」と自信をもらった。昨年のミラノのコンクール『Piano Lovers Over40』では、フランスの名教授たちに教を受けたラヴェルの『ソナチネ』を演奏し、第1位受賞を果たした。

「アマチュアコンクールには、私と同じように音楽をこよなく愛する人々との出会いがあります。コンクールで出会った友人たちは、一生の財産です」という斎藤さんの言葉に、創設者ベッケルマン氏が理念とする「アンチコンクール」の精神——アマチュアピアノニストたちが「対決」するのではなく、手を取り合う「こと——を思いだした。なぜここには職業や国籍の垣根が存在しないのか?批判や競争の代わりに、アマチュアピアノニストたちは「音楽への愛」と「進化への意志」を分かち合うからだ。